

モ ミ

宮内 泰之(人間環境学科)

1. はじめに

モミ (*Abies firma*) はマツ科モミ属の常緑針葉樹である。本州、四国、九州の丘陵地から山地に自生している。モミはオミ (臣) から転じた音との説もあるが、その語源ははっきりしていない。現在では、クリスマスツリーの木として思い浮かべる方が多いであろう。樹形が円錐形の整った形になるので、庭園や公園、広場等のシンボルツリーとして植栽されている場面もよく見られる。果実は球果である。ただし、根元を探しても‘松ぼっくり’のようなものは見つけられない。というのも、モミの球果は枝上で直立して成熟したのち、種鱗(松ぼっくりを構成する木質化した鱗状のもの)がばらばらに飛散してしまうのである。この点は、近縁のトウヒ属(後述)との識別点でもある。モミ材はきれいな白みを帯びており、腐りやすいので棺桶に利用された。また、卒塔婆や祭神具などにも使われているほか、近年では、建築材としても人気があるそうである。

モミ属は、世界に約40種が知られ、日本には5種が自生している。モミのほかにも、モミよりもやや冷涼な地域に自生するウラジロモミ (*A. homolepis*)、本州の亜高山帯に自生するオオシラビソ (*A. mariesii*)、シラビソ (*A. veitchii*)、北海道の山地に自生するトドマツ (*A. sachalinensis*) がある。モミとウラジロモミの違いは、若い枝に黒褐色の短毛が生えるのがモミ、無毛なのがウラジロモミなので、興味のある方は確認されたい。

2. クリスマスツリーとして

クリスマスツリーは、キリスト教以前の異教徒時代に、冬至に魔よけとし

て常緑樹を家の内外に飾った習慣にその起源を持つ。「このときモミもしくはドイツトウヒを用いていたのはオーストリアの一部やエルザス地方で、ドイツ東部ではセイヨウイチイ、南西部のシュヴァーベンやファルツではツゲ、スイスではセイヨウヒイラギが用いられた。モミの木を用いた現在のようなツリーは、シュヴァルツヴァルト地方やエルザス地方の南西ドイツで生まれた。飾り付けをしたツリーが最初に記録に登場するのは、1419年、ドイツのフライブルクにおいて」だそうである（『クリスマスの文化史』より引用）。いずれも常緑樹が用いられたことは、暗く寒い冬の間も青々とした緑をつけている姿に、人々が生命力や希望を見出していたためであろう。



現在のヨーロッパでは、クリスマスツリーの主流はモミではなくトウヒ属のドイツトウヒ (*Picea abies*) である。ドイツトウヒは一般にはフィヒテ (Fichte) と呼ばれ、ヨーロッパ北中部では多く生育している。一方、モミはタンネ (Tanne) と呼ばれ、ヨーロッパ中部に自生する唯一のモミ属の木、ヨーロッパモミ (*A. alba*) がこれにあたる。クリスマスツリー発祥の地であるドイツでは、クリスマスツリーや、枝や葉の飾り付けとしては、本来タンネのほうが尊ばれていたようである。また、タンネの枝は切っても葉はなかなか落ちないが、フィヒテの葉はすぐに落ちてしまうので、屋内の飾り付けにはタンネが適していたのであろう。現在、タンネに代わってフィヒテがクリスマスツリーの主流となっている背景には、ここ200年の間にタンネが自生地から急速に姿を消している状況がある。

日本での最初のクリスマスツリーの記録は、幕末の1860年にみられる。オイレンブルクという人物がドイツから日本との条約締結に向けて派遣された際に、クリスマスを迎えたのでクリスマスツリーを飾った様子が当時の記録に記されている。要約すると、「江戸近辺では本当のモミの木がなかなか見つからないので、何マイルも先まで馬を飛ばしてあらゆる植木屋を探し

回り、ようやく自分たちが用いるモミの木と外見がそっくりなものを見つけた」とのことである。はたしてこれがモミ (*Abies firma*) であったかどうかはわからない。しかし、日本の山野には幸いなことにモミは広くふつうに自生していたため、これが今日までクリスマスツリーとして利用されているのである。

3. モミとドイツトウヒの違い

モミ (モミ属) とドイツトウヒ (トウヒ属) はいずれも円錐形の整った樹形となり、葉の雰囲気も一見似ているが、いくつかの異なる点がある。まず、先述の通り、モミ属の球果は直立してつき、種鱗がばらばらに飛散する。一方、トウヒ属の球果は下垂し、球果丸ごとが枝から離れて落ちる。葉や葉のつき方も異なる。モミ属の葉は枝との付け根が吸盤状になっており、枝に直接ついている。いっぽう、トウヒ属の葉は葉枕という木質化した部分を介して枝につけているので、簡単に見分けられる。材についても、白みを帯びたモミ属に対して、赤みを帯びるトウヒ属の違いがある。生育環境はやや異なる。日本では、モミ属のうちモミは、



東京近辺では高尾山のように、暖温帯と冷温帯が接する、いわゆる中間温帯域の尾根沿いなどに多くみられる。一方、トウヒ属はやや冷涼な山地に限られる。トウヒ属の樹木としては、日本では北海道のエゾマツが有名である。

4. 多摩市とモミ

恵泉女学園はキリスト教主義の学校なので、大学のキャンパス内にもキリスト教にちなむ植物を多く見ることができている。上述したクリスマスツリーの起源となる樹木は、いずれもキャンパス内に植えられている。ただし、ドイツトウヒは見られないが、同属のエゾマツを見ることができているので、興味のある方はモミとの違いを確認していただきたい。モミは2本植えられてい

るが、そのうち1本は、残念ながら生育不良の状態である。原因はおそらく地下部にあると思われる。モミは本来深根性の樹木である。しかし、キャンパス内で地面を掘ってみるとわかるが、20cmも掘り進むとキャンパス造成時に入れたと思われる小石を含む層に突き当たり、それを突破すると、今度は地山と思われるとても緻密で硬い赤土層となる。つまり、モミのような深根性の高木にとってはもともと厳しい生育環境であることがわかる。それに加えて、モミは移植がとても難しい。樹木を植栽する際には、植栽地の土壌の状況をよくよく考慮する必要がある、ということであろう。

モミは、近年では多摩市にも少しなじみのある樹木となりつつある。クリスマスシーズンになると、多摩センター駅前のパルテノン大通りの名物となっているイルミネーションのシンボルツリーは、高さが15mほどあるモミである。このモミは、多摩市と友好都市である長野県富士見町より毎年寄贈されるそうである。生木の巨大なツリーは、これからも多摩センターのクリスマスの名物となってくことだろう。ところで、クリスマスの後、このモミがどこへ持っていかれるのか、ちょっと心配なところでもある。ヨーロッパモミのように、自生地から姿が消すようなことがないことを祈りたい。

参考文献

- 江村一子. 針葉樹の女王, タンネ (Tanne, *Abies alba*). プランタ 91, 61-67. 研成社. 2004.
- 江村一子. フィヒテ (Fiche, *Picea abies*). プランタ 97, 31-38. 研成社. 2005.
- 城川四郎, 高橋秀男, 中川重年ほか. 樹に咲く花(合弁花・単子葉・裸子植物). 山と溪谷社. 2001.
- クラウス・クラハト, 克美・タテノクラハト. クリスマス, どうやって日本に定着したか. 角川書店. 1999.
- 中井昌男訳. オイレンブルク日本遠征記, 下. 雄松堂出版. 1985.
- 若林ひとみ. クリスマスの文化史. 白水社. 2004.